

昨シーズンと春シーズンの話題から View from Down Under

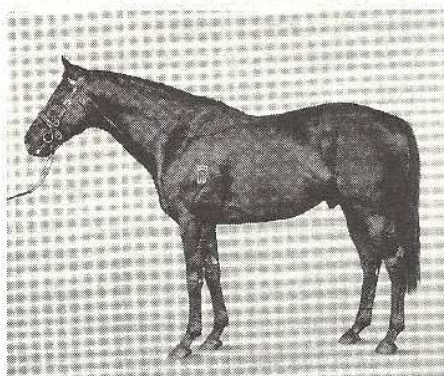
ハイランド真理子

ロンロとマカイビーディーヴァ

英語の表現に“Match Made In Heaven”という表現がある。「天国で作られた最高の組み合わせ」ということになるのだが、オーストラリアの競馬界では、その「最高の組み合わせ」つまり「最高のカップル」の話題がしきりだ。カップルとは、メルボルンカップを3連勝した伝説の牝馬マカイビーディーヴァと、G Iを11勝した伝説のチャンピオン馬ロンロのこと。2頭が獲得した総賞金は2000万ドルにも上る。さて、ロンロは、サードシーズンのリーディングサイアーになり、今年軒並み種付け料が下がる中で、去年の3万3000ドルから、今シーズンの種付け料が8万8000ドルとなった。一方マカイビーディーヴァにとっては、今シーズンが6回目の種付けになる。マカイビーディーヴァの最初の年は、ガリレオ、そ



日本の天皇賞・春にも出走したマカイビーディーヴァ (2005年)



人気急上昇の種牡馬ロンロ

れからフサイチペガサス、エンコスタデラゴ、モアザンレディに種付けに行った。2007年には再びエンコスタデラゴに行く予定だったが、馬インフルエンザのためにエンコスタデラゴが検疫所を出ることが出来ずに、泣く泣くフサイチペガサスにしたという経緯がある。では子供たちは？ 初仔のロックスターダムは現在3歳、そろそろレースに出てくる予定だ。オーストラリアでは一般的に2歳でデビューさせるが、マカイビーディーヴァ自身がそうだったように、彼女の子供も3歳デビューとなる。2008年に生まれたフサイチペガサス産駒は、去年のメルボルンカップの優勝馬ジョッキングを管理しているマーク・カヴァナー調教師に120万ドルで落札されている。マカイビーディーヴァとロンロは、ともに一世を風靡したチャンピオン馬であるが、レースで直接対決したのは2004年に一度だけ。私はロンロの引退レースをランドウィック競馬場に見に行ったが、残念ながらマカイビーディーヴァとの対戦は目の前で見ていない。対決の場となったプレミントン競馬場でのオーストラリアンカップ(2000m)は、ロンロが勝ち、マカイビーディーヴァは6着に沈んだ。

2009/10シーズンランキング

また新しい南半球の競馬シーズンがやってきて、それぞれにランキングが出ている。今年はスタリオンを含めて、ダーレーオーストラリアの大きな飛躍が見られる。

調教師ランキング

ピーター・スノーデン調教師は、もともとオーストラリア最大の厩舎を持つインガム兄弟のヘッドトレーナー、ジョ

ン・ホークス調教師のアシスタントトレーナーであった。しかし、そのホークス調教師がインガムと袂を分かち、後を継いでヘッドトレーナーになったものの、すぐにインガム兄弟の持っていた全ての生産牧場と厩舎、そして馬が、ダーレーに売却されてしまった。まさに、ドラマの中の人だ。その彼は、ダーレーグループの一員として仕事を始め、昨シーズンは、ゲイ・ウォーターハウス調教師と1.5勝(同着を0.5勝に換算)の差で、シドニーのリーディングトレーナーシップを争っていたのだが、シーズン最終日でウォーターハウス調教師が2勝、しかも皮肉なことにモハメド殿下の馬で……。スノーデン師は鼻差でリーディングの座を逃した。あれから1年、7月31日の最終日を迎え、ピーター・スノーデン調教師はシドニーのトップトレーナーとなった。

総合・サイアーランキング

さて、リーディングサイアーランキングを見てみよう。総合の1位と2位はリダウツチョイスとエンコスタデラゴで、ここ数年間死闘を続けている。しかし、3位にロンロ、4位にストリートクライ、5位にコマズと、10位以内にダーレーオーストラリアの種牡馬が3頭も入り、大きく飛躍した。ロンロは、前述のようにサードシーズンのリーディングサイアーにもなった。去年のランキングが44位だからその躍進振りが分かる。数いる種牡馬の中で100頭以上の勝ち馬数を出したのは、わずか10頭。ロンロもこの中に入っている。産駒でG I勝ち馬のデンマンは、今年ダーレーで繋養されることになった。父と息子が隣り合わせの馬房にいるという。ダーレーの種牡馬の成功についてノミネーションズ・マネージャーである、アラスデア・ブルフォード氏は「今回このような良い成績を上げたことは、本当にエキサイティングなことですよ。最も嬉しいのは、まだ種牡馬として若いロンロが大活躍していること、そして、コマズも多くの勝ち馬を出していることです。コマズは、勝ち馬の数でトップになります。本当に素晴らしい結果ですよ」と手放しで喜んでいました。

昨年はエンコスタデラゴに負けたが、また1位に返り咲いたリダウツチョイス。昨シーズン大活躍した3歳の牝馬メリートは、このリダウツチョイスの娘。管理するジェラルド・ライアン調教師をして「人生最大の贈り物」と言わしめた牝馬だ。昨シーズンは重賞を14戦してG I 2勝、G II 1勝。重賞で9回人着、うち5回がG Iという結果を出し、今年の春シーズンでも活躍が期待される人物だ。リダウツチョイスは、昨シーズンの重賞勝ち馬14頭をプラスして、18頭のG I勝ち馬を



今年シドニーのリーディングトップとなったピーター・スノーデン調教師

含む63頭の重賞勝ち馬を出したことになる。

2位のエンコスタデラゴを所有するクールモアスタッドは、トップ10の9位と10位にもファストネットロックとハイチャパラルを入れた。デインヒル血統のファストネットロックはともかく、ハイチャパラルはサドラズウェルズ血統で、ちょっと珍しい。リーディング・セカンドシーズンサイアーの1位と2位はこの2頭が占めた。3位はダーレーのシャマダール、4位はエミレーツパークスタッドのアルマハール、5位にはリダウツチョイス産駒でアローフィールドのナットアシングルダウトが入った。

総合サイアーランキングの6位と7位はヴァイナリスタッドのテストロッサとモアザンレディが入った。テストロッサは、その競走馬生活最後の年に日本に遠征してちょっと残念なレースを見せたけれど、種牡馬としては2008/09年度のシーズンはランキング8位となかなかの活躍を見せた。年度末にアメリカのデルマーをベースにするブルーシャガールが、準重賞のウィッカーステークスを勝ったというニュースが入った。このブルーシャガールは、テストロッサがフランスにシャトルされていた時の産駒。ブルーシャガールは、フランスでGⅢを勝ち、その後アメリカのフリーオ・カナニ調教師の厩舎に転厩した。今後、GⅠレベルで競走するというから楽しみだ。

ファーストシーズン・サイアーランキング

後ろから追いかけてくるダーレーグループの脅威があるけれど、アローフィールドをほっとさせたのは、ファーストシーズン・サイアーランキングの2位に、スニッツェルが入ったことだろう。ご存知のようにスニッツェルは、リダウツチョイス産駒だ。かつて私は、デインヒルはオーストラリアのサンデーサイレンスだと言ったことがあるが、今その時代が、日本とオーストラリアの間で終焉して、その息子やそのまた息子たちの時代に入っている。ファーストシーズンサイアーの1位は、やはりリダウツチョイス産駒のストレイトナムである。ストレイトナムは8代続く伝統のウィデン牧場で繁栄されている。3位はビクトリア州の名門ヤママンパークにいたフォープレイ（父デインヒル）。しかし、今年の初め生殖能力がないので引退すると発表された。わずかな頭数で3位に入ったフォープレイだったが、悲劇と言わざるを得ない。このファーストシーズンサイアーのランキングで11位に入ったのが、あのサンデーサイレンス血統のキープザフェイス。アダム・サンダスター氏が所有するスエットナムスタッドで繁栄されている。現在、

オーストラリアのサンデー血統はこの1頭のみ。オーストラリアももっとサンデーの血を人ればいいのに……とぼやき。

メルボルンレーシングカーニバル

今年はメルボルンカップの創設150周年記念である。日本馬は来るのだろうか、来ないのだろうか。強いからな、来たら怖いな、などという気持ちが、先月末に発表されたレーシング・ピクトリアの発表であつたという間に吹き飛んだ。ありとあらゆる新聞、競馬関連のマスコミが、今年のメルボルンに日本馬がやってくると大々的に報道した。日本馬のワン・ツー・フィニッシュは未だにオーストラリアの人々の目に焼きついているだけに、ファンにとって、その日本から遠征馬が来ないのは「寂しい」という気持ちもあったのだろう。しかしながら、オーストラリアの調教師たちは一様に今回のニュースについて、「そうか、来るのか。怖いな」と言っていた。日本馬についての関心は2006年のメルボルンカップ以来大変高くなっている。先週は、「あのポップロックが、アイルランドで優勝」などという記事も出るほど。

さて、オーストラリアで馬インフルエンザが発生して、そのエラディケーション（除去）と検疫環境の整備におよそ3年かかっている。7月末にオーストラリアの検疫局が日本の検疫施設をチェック、東京競馬場と中山競馬場を検疫施設として認可した。遠征馬は日本とオーストラリアの検疫施設に全部で5週間も滞留する必要がある。日本で2週間、オーストラリアで3週間と、信じられないほどの長さだ。しかし、これは日本馬だけの条件ではなく、世界中ほぼどの国からの馬たちも同じ条件だ。さて、検疫施設だが、今年はいくつかのサンダウン競馬場からワラビー競馬場に移る。ワラビーというのはメルボルンの西方で、メルボルン空港の近くにある。規則を読むと国際レースのために新しい検疫施設を作り、今後は施設への出入りを合わせて管理がより厳しくなる。もっとも厳しくなかったほうがおかしいのではあるが。

8月3日にメルボルンのレーシングカーニバルで実施される主要レースの第一次アクセプタンスが発表された。厳しい検疫にもかかわらず、今日の発表には日本馬の名前が5頭も出ている。まずは、10月23日にムーニーバレー競馬場で開催されるコックスプレート。全部で186頭の登録があり、うち海外からの馬は香港からエイブルワンなど10頭。その中には日本の鮫川一歩厩舎のホワイトビルグリムがいる。また、10月16日のコーフィールドカップは、全部で235頭の登録があり、



今年の天皇賞・春で1・2着となったジャガーメイルとマイネルキッツもメルボルンカップに登録

うち海外馬は36頭。日本からは、前述のホワイトビルグリム、村山明調教師が管理するスリーオリオン、野中賢二調教師の管理するトウカイトリック、それに、天皇賞・春で1着の堀宣行厩舎のジャガーメイル、2着だった国枝栄厩舎のマイネルキッツの5頭。そして、11月2日に実施されるメインのメルボルンカップ。全部で253頭の馬が登録されて、うち海外からは45頭。日本馬は、コーフィールドカップにノミネートされた5頭すべてが登録をしている。また、「おっ」と驚いたのは、VRCダービーに日本の宮本博厩舎のブレイクアセオリーが登録されていること。この馬は、実はオーストラリア産。勝てば、故郷に錦を飾ることになる。

メルボルンカップを始めとするメルボルンレーシングカーニバルは、年々国際化を強めてきて、さすがに、パート・カミングス調教師も「外国馬を入れるな」とは言わなくなってしまった。今年で83歳になるカミングス調教師、これまで12回メルボルンカップを優勝、昨年も「もしかして」と有力馬を出したが、13回の優勝杯を獲得することが出来なかった。つい先だってまで身体の状態を崩していたが、そろそろカップシーズンも近づき、またぞろ元気の出るころ。昨年コックスプレートを勝ったソーユースィンクとVRCオークス優勝馬フェイントパーフェュームで、大レースをねらっている。ちなみに、前売りの馬券では、彼のフェイントパーフェュームが本命になっていたが、日本馬の参戦が決まってから、ジャガーメイルが本命、マイネルキッツが2番手の人気となっている。今年のオーストラリアの春は、わくわく。私も、忙しくなるぞー。

筆者●プロフィール



Mariko Hyland ■ 団塊の世代。アナウンサー、コピーライターなどを経る。著書に「オーストラリアとニュージーランドの競馬ガイドブック」など。オーストラリア人の夫、2人の娘とシドニー在住。